

## &lt;原 著&gt;

大学受験生におけるネガティブ・サポート尺度の作成  
およびネガティブ・サポートと抑うつとの関連

宮田かな恵\*・藤井 靖\*\*・菅野 純\*\*

## 要 約

本研究では、大学受験生へのソーシャル・サポートをより効果的に活用するために、ソーシャル・サポートの効果を妨害していると考えられる「ネガティブ・サポート」の内容を探索的に調査し、「大学受験生ネガティブ・サポート尺度」を作成した。さらに、ネガティブ・サポートが抑うつと関連するかを検討した。高校3年生を対象に質問紙調査を行い、筆者が作成した大学受験生ネガティブ・サポート尺度の得点により対象者を高群と低群に分け、The Center for Epidemiologic Studies-Depression Scale (CES-D) 得点を用い、Mann-Whitney 検定を行ったところ、有意な差はみられなかった。しかし、CES-D と大学受験生ネガティブ・サポート尺度の相関係数を算出したところ、「自分ですでに決めていることに関してあれこれと提案される」「見当外れのアドバイスをされる」に関して有意な正の相関がみられた。本研究結果から、背後に共感的理解の少ないサポートがネガティブに作用しやすく、抑うつにつながることが示唆された。

**キーワード**：大学受験生、ネガティブ・サポート、抑うつ

## 問題と目的

大学受験における受験戦争は、推薦入試やAO入試などの導入により緩和されていると認識されているが、実際、高校生が抱えるストレスの大部分は学業上のストレスであり、その中でも「大学受験」は、長期に渡って継続的な苦渋体験を強いられるため、苛立ち・不安・あせり・疲労感・憂うつ感を感じるなど、精神的健康に悪影響を及ぼすことが報告されている(小山, 2001; 佐久本・橋本, 1996)。

大学受験生のストレスに対してソーシャル・サポートが有効であることは数多くの研究で証明されてきたが、近年、ソーシャル・サポートがネガティブな効果を持つ可能性が注目されて

きており、検証が試みられている(e.g., 菊島, 2003; 亀山・坂本・岡, 2008; 周・深田, 1995)。

ソーシャル・サポートがネガティブに働く場合を「ネガティブ・サポート」と総称し、必要以上のサポートや不十分なサポートなど、被援助者が「助けにならなかった・迷惑だった・嫌な思いをした」と主観的に判断するサポート(菊島, 2003)と定義されている。

稲葉(1998)は、ネガティブ・サポートが精神的健康に負の影響を及ぼすことを明らかにし、中村(2002)も、ソーシャル・サポートの不足が抑うつを高めることを明らかにした。このことから、ネガティブ・サポートはソーシャル・サポートの効果を妨害している可能性があるといえる。

サポートが被援助者にネガティブに働く背景には、菊島(2003)は“自分に余裕が無く、本当につらく苦しいときは、サポートに対してひね

---

\*早稲田大学大学院人間科学研究科

\*\*早稲田大学人間科学学術院

くれた受け取り方しかできない”という例や，“自分の気分が非常に沈んでいるとき、また疲れているときは、サポートを受けてもわずらわしく感じ、逆にストレスになる”という例，“自分のところが弱っていて不安定なときは、サポートを受けたときに普段なら気にならないことでも傷ついたりする”という例があることを明らかにしている。このことより、大学受験生は長期間に渡りストレスがかかりやすい状況である可能性が高いため、ソーシャル・サポートがネガティブに働きやすいと考えられる。

以上のことから、本研究では慢性的にストレスフルな状態に置かれているであろう大学受験生を対象としたソーシャル・サポートの、より効果的な活用を目的とする。そのために、大学受験生へのソーシャル・サポートの効果を妨害し、抑うつを高めていると考えられる「ネガティブ・サポート」の内容を探索的に調査し、ネガティブ・サポートの内容を明らかにする。また実際にネガティブ・サポートの量と抑うつに関連があるかも明らかにする。

本研究ではソーシャル・サポートをネガティブに受け取る場合の被援助者の主観的な体験を詳細に明らかにするために質的な調査を行う。その理由として、菊島(2003)も述べているように、ソーシャル・サポートを提供されることがポジティブな体験もしくはネガティブな体験になるかは当然のことながらその時のケースごとにさまざまであり、複数の要因が複雑に関連している可能性があること、さらに、どのような状況のときにどのような体験をするかということは、その見方や感じ方についての力点の置き方が人により異なることが予測され、まずは基礎的な情報を得るためにも、対象者がその体験について回想し、その人なりの観点から自由に記載してもらうという質的調査の方法のほうがより豊かな情報を得ることができ、本研究には適していると判断したためである。その後、質的調査から得られた情報をもとに「大学受験生

ネガティブ・サポート尺度」を作成し、抑うつとの関連を量的調査を通して検討する。

ネガティブ・サポートの内容を明らかにし、その要因を検討することは、現実のソーシャル・サポート過程を的確にとらえることであり、ソーシャル・サポートをより効果的に活用することが可能となる。家庭内や友人同士、教師と生徒間など、日常場面でサポートにも生かすことができ、実際の臨床心理学的援助活動を行う上でも有益な情報になると考えられる。

## 方法

### 大学受験生ネガティブ・サポート尺度の作成 調査 1: 尺度構成のための自由記述型質問紙調査

**調査対象** 首都圏私立大学 1 年生を対象とした。大学 1 年生を対象としたのは、大学受験を経験し、かつ大学受験からの月日が最も浅いためである。内訳は、男子 24 名、女子 26 名の計 50 名であった(有効回答率 100%)。

**調査時期** 平成 24 年 10 月下旬～11 月上旬

**調査手続** 3 つのサークルの各代表者に依頼し、サークル会議時に所属する学生に対し配布した。その場で記載してもらい、回収した。

**質問紙の構成** (1)フェイスシート:性別と入学形態(一般入試/AO 入試/推薦入試/その他)をたずねた。(2)自由記述欄:教示文として、「ソーシャル・サポート(他者からの援助)は、普段生活の中で、ストレスの解消や問題解決のために役立つものと言われていますが、あなたが大学受験生のとき、自分にとってあまり助けにならなかった、または逆に迷惑や嫌な思いをした他者からの援助体験はどんなものがあつたか(その時の状況や、援助方法)、思い浮かべて書いてください。なお、書きたくないことがある時は無理をして書く必要はありません。」を載せ、自由記述スペースを設けた。

**倫理的配慮** 質問紙の表紙に、①プライバシー

一保護、②匿名性の保持、③参加の自由の保障について明記した。

**分析方法** 予備調査の回答の記述をもとに、筆者と、心理学を専攻する学生の合計 2 名で、KJ 法(川喜田, 1967)による整理・分類を行った。

## 調査 2：尺度項目の検討のための質問紙調査

**調査対象** 首都圏私立大学 1 年生を対象とした。内訳は、男子 17 名、女子 49 名で、そのうち回答に不備のあった男子 1 名を除いた計 65 名であった(有効回答率 98%)。

**調査時期** 平成 24 年 11 月上旬

**調査手続き** 1つのサークル代表者に依頼し、サークル会議時に所属する学生に対し配布した。その場で記載してもらい、回収した。

**質問紙の構成** (1)フェイスシート：性別と入学形態(一般入試/AO 入試/推薦入試/その他)をたずねた。(2)大学受験生ネガティブ・サポート尺度：教示文として、『ソーシャル・サポート(他者からの援助)は、普段生活の中で、ストレスの解消や問題解決のために役立つものと言われていますが、自分にとって“助けにならなかった・迷惑だった・嫌な思いをした”他者からの援助のことを「ネガティブ・サポート」と言います。あなたが大学受験生のとき、以下に挙げる他者からの援助をどの程度ネガティブ・サポート(助けにならなかった・迷惑だった・嫌な思いをした)と感じたかお答えください。』を載せ、調査 1 で得られた回答から、筆者が作成した「大学受験生ネガティブ・サポート尺度」の暫定尺度 24 項目について、大学受験生当時、それぞれのソーシャル・サポートについてどれくらい“助けにならなかった・迷惑だった・嫌な思いをした”と感じていたか、「感じた」「少し感じた」「どちらでもない」「あまり感じなかった」「感じなかった」の 5 件法でたずねた。「感じた」は 5 点、「少し感じた」は 4 点、「どちらでもない」は 3 点、「あまり感じなかった」は 2 点、「感じなかった」は 1 点を付与し得点化した。従って、得点が高いほど、その項目のソ

ーシャル・サポートをネガティブに受け取っていたことを意味する。

**倫理的配慮** 質問紙の表紙に、①プライバシー保護、②匿名性の保持、③参加の自由の保障について明記した。

**分析方法** SPSS ver. 20. for Windows を用いて、ネガティブ・サポート得点や平均値を算出した。

## ネガティブ・サポートと抑うつの関連

**調査対象** 首都圏私立高校 3 年生を対象とした。内訳は、男子 50 名、女子 20 名の計 70 名で、そのうち、回答に不備のあった 5 名を除いた男子 47 名、女子 18 名の 65 名(17~18 歳)であった(有効回答率 93%)。

**調査時期** 平成 24 年 11 月下旬

**配布手続き** 2つのクラス(配布許可を得られた理系クラスと文系クラスの各々 1 クラス)の各担任教諭が、HR の時間に一斉に配布し、その場で回収した。

**質問紙の構成** (1)フェイスシート：性別をたずねた。(2)大学受験生ネガティブ・サポート尺度：調査 1・2 をもとに筆者が作成した「大学受験生ネガティブ・サポート尺度」(全 22 項目)を用い、抑うつとの関連を調べた。日常体験するネガティブ・サポートに対して、「全くない」「あまりない」「しばしばある」「よくある」の 4 件法でたずね、各々 1 点、2 点、3 点、4 点を与え、それらを合計して評価した。(3)抑うつ尺度：The Center for Epidemiologic Studies-Depression Scale (以下 CES-D と訳す)の邦訳版(島・鹿野・北村・浅井、1985)を用いた。

**倫理的配慮** 質問紙の表紙に、①プライバシー保護、②匿名性の保持、③参加の自由の保障について明記した。

**分析方法** 分析には、SPSS ver. 20. for Windows を用いた。大学受験生ネガティブ・サポート尺度については内的整合性の確認のため Cronbach の  $\alpha$  係数を算出、因子間の相関、CES-D と各因

子の相関は Spearman の順位相関係数により確認した。また、Mann-Whitney 検定を用いてネガティブ・サポートと CES-D の関連の有意性を検討した。

## 結果

### 大学受験生ネガティブ・サポート尺度の作成

**調査 1 の結果** 先行研究の菊島(2003)の要因分類と対応する 9 つのカテゴリーと、先行研究にはない 4 つの項目に分類された(Table 1)。

**調査 2 の結果** 調査 1 で得られた 24 項目のうち、極端に平均値が低い 2 項目(「頼んでいないのに夜食を出される(平均 1.95)」・「推薦入試などですでに合格している友人から参考書をもらう(平均 1.88)」)を除外した合計 22 項目に因子分析(主因子法・プロマックス回転)を行った。その結果、因子負荷量.36 以上を基準とし、4 因子が妥当であると考えられた。Cronbach の  $\alpha$  係数は  $\alpha = .77$  であった。4 因子の累積寄与率は 48.16% であった。Table 2 にプロマックス回転後の因子パターン行列を示した。

各因子は以下のように解釈された。第 1 因子の 7 項目は、親や先生、自分より成績が上の友人からなど、全体的に自分より立場が上である人物からの期待や応援であるため、「上の立場からのサポート」因子と命名した。第 2 因子の 8 項目は、すでに受験を終えている友人からの応援や誘い、見当外れなアドヴァイス、「勉強しろ」、「頑張れ」など自分でもわかりきっていることを言われる、すでに決めていることへの提案など、全体的に自分とは異なる立場の人物からのおせっかいと考えられるため、「異なる立場からのおせっかいサポート」と命名した。第 3 因子の 4 項目は、「また来年があるよ」や「大学受験が全てではない」など、一見すると受験へのプレッシャーを和らげているような気遣いの言葉と考えられるため、「気遣いサポート」と命名した。第 4 因子の 3 項目は、全て友人からのサポ

ートであり、また一緒に勉強や休憩に誘うなど、本人の勉強ペースを乱す可能性のあるサポートと考えられるため、「友人密着サポート」と命名した。各因子の Cronbach の  $\alpha$  係数は、第 1 因子.69, 第 2 因子.44, 第 3 因子.24, 第 4 因子.49 であった。

因子間の相関係数を算出したところ、因子 1 と因子 2 は有意な中程度の正の相関がみられた( $r = .55, p < .01$ )。因子 1 と因子 3 においても有意な中程度の正の相関がみられた( $r = .42, p < .01$ )。因子 1 と因子 4 は有意な正の相関がみられた( $r = .34, p < .01$ )。因子 2 と因子 3 においても有意な正の相関がみられた( $r = .34, p < .01$ )。因子 2 と因子 4 は有意な中程度の正の相関がみられた( $r = .41, p < .01$ )。因子 3 と因子 4 は有意な正の相関がみられた( $r = .36, p < .01$ ) (Table 3)。

また、ネガティブ・サポート得点の平均値により、男子・女子・男女総合それぞれにおいて、得点の高かった上位 5 つを Table 4 に示した。

### ネガティブ・サポートの量と抑うつとの関係

**性差** ネガティブ・サポート得点の性差を Mann-Whitney 検定で分析した結果、男子の中央値 29.70, 女子の中央値 41.61,  $p = .02$ , U 値 268.00 で女子の方がネガティブ・サポートの量が多く、有意差がみられた。抑うつの性差についても同様に Mann-Whitney 検定で分析した結果、男子の CES-D 得点の中央値 32.93, 女子の CES-D 得点の中央値 33.19,  $p = .96$ , U 値 419.50 で有意差はみられなかった。

また、CES-D カットオフポイントである 16 点以上の人数の割合は、男子 47 名中 39 名で 83.01%, 女子 18 名中 15 名で 83.33%, 男女全体 65 名中 54 名で 83.10% であった。

**男女総合結果** 男女を合わせた全員のネガティブ・サポート得点の平均は 47.94, 標準偏差は 8.77 であった。そこで平均  $\pm 1/2$  標準偏差を基準として、高群(22 名)と低群(17 名)に分け、それぞれの CES-D 得点に差があるか調べるために Mann-Whitney 検定を行った。その結果、高群

Table 1 菊島(2003)の要因分類との対応

菊島(2003)の要因分類	大学受験生ネガティブ・サポート尺度項目
その問題についてうまくいった者からのサポート	自分の成功体験に基づいてアドバイスをされる 推薦入試などですでに合格している友人から応援される 推薦入試などですでに合格している友人から遊びに誘われる
上の立場にある者からのサポート	自分より成績が上の友人からはげまされる
被援助者の考え方・感情を理解しない、 尊重しない者からのサポート	見当外れのアドバイスをする 「また来年があるよ」と言われる 「大学受験が全てではない」と言われる
被援助者にもわかりきったアドバイス	「勉強しろ」と言われる 「頑張れ」とばかり言われる
プレッシャーとなるサポート	親から期待される 先生から期待される 受験に関して「喝」を入れる話をされる 「やれば出来る」と言われる
被援助者がその問題に熟知しており、 解決について自分なりの考えがある場合	自分ですでに決めていることに関してあれこれと提案される
被援助者が自分だけでやり遂げたいと 考えている場合	友人から勉強中に間違っている問題を指摘される 友人から勉強中に息抜きに誘われる 友人から勉強しようと誘われる
被援助者と親密な関係でない援助者からの サポート	社交辞令の応援をされる
該当なし	「受験勉強を頑張っていない友人からはげまされる」 「自分より成績が下の友人からはげまされる」 「受験生だからと何かと気をつかわれる」 「卒業旅行の話をされる」

の CES-D の中央値 19.66, 低群の CES-D の中央値 20.44,  $p=.83$ , U 値 179.50 で, 有意差はみられなかった。

#### 性別ごとの結果

**男子** 男子全員のネガティブ・サポート得点の平均は 46.40, 標準偏差は 8.45 であった。そこで平均  $\pm 1/2$  標準偏差を基準として, 高群(17 名)と低群(13 名)に分け, それぞれの CES-D 得点に差があるか調べるために Mann-Whitney 検定を行った。その結果, 高群の CES-D の中央値 15.29, 低群の CES-D の中央値 20.44,  $p=.83$ , U 値 179.50 で, 有意差はみられなかった。

**女子** 女子全員のネガティブ・サポート得点の平均は 51.94, 標準偏差は 8.52 であった。そこで平均  $\pm 1/2$  標準偏差を基準として高群(7 名)と低群(5 名)に分け, それぞれの CES-D 得点

に差があるか調べるために Mann-Whitney 検定を行った。高群の CES-D の中央値 7.71, 低群の CES-D の中央値 4.80,  $p=.20$ , U 値 9.00 で, 有意差はみられなかった。

#### 相関係数

CES-D と各因子の相関係数を算出したところ, 因子 2 との間においてのみ有意な正の相関がみられた( $r=.30, p<.05$ )。

また, CES-D とネガティブ・サポート尺度の各項目の相関係数を算出したところ, 項目 15(自分ですでに決めていることに関してあれこれと提案される)との間に有意な正の相関がみられた( $r=.37, p<.01$ )。項目 16(見当外れのアドバイスをする)との間にも中程度の有意な正の相関がみられた( $r=.45, p<.01$ )。

Table 2 ネガティブ・サポート尺度の因子分析結果

項目	1	2	3	4	共通性
第1因子 上の立場からのサポート( $\alpha=.69$ )					
親から期待される	.841	-.062	-.001	-.153	.513
先生から期待される	.659	-.033	.199	-.073	.530
受験に関して「喝」を入れる話をされる	.618	-.069	.105	-.136	.544
「元々は出来る」と言われる	.592	.084	-.164	.046	.421
自分の能力構成に基づいてアドバイスをする	.526	-.044	.196	.259	.503
社交辞令の応援をされる	.440	.289	.259	.032	.657
自分より成績上の友人からほげまされる	.412	.308	-.372	.305	.683
第2因子 異なる立場からのお世かけもサポート( $\alpha=.44$ )					
見当外れのアドバイスをする	.186	.727	.026	-.111	.321
推薦入試などですでに合格している友人から応援される	-.135	.679	-.108	.133	.589
推薦入試などですでに合格している友人から遊びに誘われる	-.368	.657	.365	.074	.457
受験勉強を頑張っている友人からほげまされる	-.130	.649	.005	.173	.507
自分より成績下の友人からほげまされる	.262	.609	-.092	.112	.611
自分ですでに決めていくことに決まっていればこれと提案される	.391	.486	.127	-.137	.343
「勉強しろ」と言われる	.165	.412	-.036	-.297	.475
「頑張れ」とばかり言われる	.292	.363	.358	-.071	.584
第3因子 気遣いサポート( $\alpha=.24$ )					
受験生だからと何かと気を配られる	.322	-.211	.630	.035	.554
「また来年があるよ」と言われる	-.149	.436	.618	-.092	.342
卒業前夜の話をされる	.432	-.216	.522	.264	.483
「大学受験が全てではない」と言われる	.017	.305	.393	.137	.538
第4因子 友人密着サポート( $\alpha=.49$ )					
友人から勉強中に聞いている問題を指摘される	-.120	.039	-.029	.636	.563
友人から勉強中に愚直さに誘われる	.049	-.042	.090	.571	.672
友人から勉強しようと誘われる	-.124	.055	.123	.494	.539
因子間相関					
1	-	.40	.09	-.02	
2		-	-.06	-.04	
3			-	-.07	



Table 3 因子間相関と CES-D と各因子の相関係数

	上の立場か らのサポート	異なる立場 からのおせっ かいサポート	気遣いサポ ート	友人密着サ ポート
CES-D 合計	.07	.30*	-.10	-.11
上の立場からのサポート		.55**	.42**	.35**
異なる立場からのおせっかいサポート			.39**	.41**
気遣いサポート				.36**
友人密着サポート				

\*\* $p < .01$  \* $p < .05$

Table 4 ネガティブ・サポート得点上位 5 つ

男子		
順位	ネガティブ・サポート	平均点
1 位	“やれば出来る”と言われる	3.11
2 位	“頑張れ”とばかりと言われる	3.06
3 位	自分より成績が上の友人からはげまされる	2.78
	“勉強しろ”と言われる	2.78
5 位	社交辞令の応援をされる	2.72

  

男子		
順位	ネガティブ・サポート	平均点
1 位	“やれば出来る”と言われる	3.11
2 位	“頑張れ”とばかりと言われる	3.06
3 位	自分より成績が上の友人からはげまされる	2.78
	“勉強しろ”と言われる	2.78
5 位	社交辞令の応援をされる	2.72

  

男子		
順位	ネガティブ・サポート	平均点
1 位	“やれば出来る”と言われる	3.11
2 位	“頑張れ”とばかりと言われる	3.06
3 位	自分より成績が上の友人からはげまされる	2.78
	“勉強しろ”と言われる	2.78
5 位	社交辞令の応援をされる	2.72

## 考察

### 大学受験生ネガティブ・サポート尺度

本研究では、慢性的にストレスフルな状態に置かれている大学受験生へのソーシャル・サポートをより効果的に活用できるようにすることを目的とし、ソーシャル・サポートの効果を妨害していると考えられる「ネガティブ・サポート」の内容を探索的に調査し、「大学受験生ネガティブ・サポート尺度」を作成した。本研究で得られた結果は、先行研究で明らかにされたネガティブ・サポートの分類にほぼ当てはまっていたため、尺度の妥当性はある程度得られたといえる。

また、「自分より成績が下の友人からはげまされる」や「受験勉強を頑張っていない友人からはげまされる」というネガティブ・サポートが存在したが、先行研究にあった、「上の立場にある者からのサポート」の真逆であるため、自分より立場が下にある者からのサポートもネガティブ・サポートとなることが新たに明らかにされた。

一方、調査2で平均値の低さから尺度項目から除外された、「頼んでいないのに夜食を出される」「推薦入試などですでに合格している友人から参考書をもらう」というサポートは、ネガティブに感じる人が少ないサポートであるといえる。

今回の調査で、一人一人の生の声が聞け、普段何気なくしている言動がネガティブに作用していたことが明らかとなった。友人関係、教師と生徒、親子関係などでこの結果が活かされることが期待される。

### ネガティブ・サポート得点

男子・女子・男女総合それぞれにおける、大学受験生ネガティブ・サポート尺度得点上位5つをみると、男子だけには「友人から勉強中に息抜きに誘われる」が入っている。これは男女

の友人関係の違いからいえると考えられる。大野(1998)が指摘しているように、高校時代を含む男子の青年期の友人関係は女子に比べ淡泊であり、男子高校生にとっては集団を持つことは特に重要視されていない。そのため、受験勉強をするときも集団ではなく個人であることが多いと予想され、自分の勉強のペースを乱されることになるサポートをネガティブに捉えてしまうのではないかと考えられる。

また、男女のネガティブ・サポート得点において女子のほうが有意に得点が高かったことについても、同じように男女の友人関係の違いからいえると考えられる。女子のほうが男子と比較して友人関係スタイルが密着しているため、友人関係のトラブルも多く、ネガティブ・サポートも発生しやすくなると考えられる。

### ネガティブ・サポートの量と抑うつとの関連

ネガティブ・サポートの量が多い人ほどCES-Dの得点が高くなると仮定していたが、有意な差はみられなかったため、先行研究とは異なる結果となった。この原因として、まずネガティブ・サポート尺度を作成する段階の調査人数が少なかった点や、質問紙を配布した大学には附属高校があり、内部推薦でそのまま入学してきた人が多く(66名中25人)、そもそも受験ストレスが少ないことが考えられるが、ネガティブ・サポートと抑うつとの関連を調べるために質問紙を配布した高校では推薦制度を利用する生徒はならず、両者の置かれた状況の差によって尺度の信頼性が低くなったことが挙げられる。

さらに、その高校は県内トップクラスの進学校であり、CES-Dカットオフポイントである16点以上の人数の割合が83%を超えたことにより有意差が出づらなかったことが考えられる。

また、ネガティブ・サポートの量と抑うつとの関連はみられなかったが、尺度項目ごとに関連をみたところ、項目15「自分ですでに決めていることに関してあれこれと提案される」と項目16「見当外れのアドバイスをされる」のみ



CES-D 得点と有意な差があった。この 2 項目が抑うつに影響を与えるサポートであると示唆されたが、その理由として、項目 15 も項目 16 も、被援助者への共感性の低さが顕著であることが挙げられる。

他の項目の立場の違いや友人関係スタイルの違いからもうかがわれるが、背後に共感的理解の少ないサポートがネガティブに作用しやすく、抑うつにつながると考えられる。

サポートがポジティブに作用するかネガティブに作用するかはサポート自体に原因があるのではなく、その背後にある被援助者への共感性の有無に関連することが考えられる。長谷川・下田 (2012) も、共感性は、ソーシャル・サポートを受けているという知覚に影響することを明らかにしている。ネガティブ・サポートは「必要以上のサポートや、不十分なサポート」というサポート授受に関連する概念であるため、共感性とネガティブ・サポートは一定の関連性を有していると推察される。カウンセリング同様、サポートをポジティブに作用させるためには、援助者は被援助者の状況、思考、気持ちなどを考え、共感的に関わる必要があることが示唆された。

### 本研究における課題

今回は小数のデータであるという限界を踏まえ、データの処理と考察をしたが、さらなる検討のためにはより多くのデータが必要であると考えられる。

また、今回「大学受験生ネガティブ・サポート尺度」を作成する際、調査対象の大学 1 年生に、付属高校からの内部推薦入試者が多かったが、ネガティブ・サポートと抑うつの関連をみる際の対象者は全員が一般入試者であった。状況や環境の違いから、抑うつ状態に影響がでる可能性があるため、今後は同じような状況・環境下の対象者にすることが必要である。

さらに、質問紙を配付した高校は県内トップレベルの進学校で大学受験を念頭に入学してくるため、CES-D カットオフポイントを上回る人数の割合が 83% を超え、それにより有意差が出づらかったことが考えられるため、対象者の学力にも偏りがないようにする必要がある。

### 引用文献

- 長谷川真穂・下田芳幸 (2012). 中学生における友人間のソーシャルサポートの互惠性と共感性およびストレス反応との関連について. 富山大学人間発達科学部紀要, 6 巻 2 号, 211-220.  
(Hasegawa,M.,Shimoda,Y.,(2012).Relationship among the Reciprocity of Social Support in Friends, Empathy, and Psychological Stress Response in Junior High School Students.)
- 稲葉昭英 (1998). ソーシャル・サポートの理論モデル  
(Inaba,A.)
- 松井豊・浦光博 (1998). (編) 対人行動学研究シリーズ 7. 人を支える心の科学. 誠信書房  
(Matsui,Y.,Uramitsu,H.)
- 菊島勝也 (2003). ソーシャル・サポートのネガティブな効果に関する研究. 愛知教育大学教育実践センター紀要, 第 6 号, pp. 239-245.  
(Kikushima,K.(2003). The Negative Effects of Social Support.)
- 大野朝子(1998). 青年の「集団への関わり方」および「友人関係」とアイデンティティ形成との関連. 日本青年心理学会大会発表論文集 (6), 40-41.  
(Ono,A.)
- 小山秀樹 (2001). 大学受験生のストレスに関する研究: 大学受験ストレス反応尺度と大学受験ストレッサー尺度の作成. 日本教

育心理学会総会発表論文集 (43), 153.

(Oyama,H.)

亀山晶子・坂本真士・岡隆 (2008) . サポートへの期待と受容のズレと, 自尊心および抑うつとの関連 : 情緒的依頼心に着目して. パーソナリティ研究 17(1), 95-97.

(Kameyama,A.,Sakamoto,S.,Oka,T.(2008). Discrepancy between Support Expectation and Reception, Self-esteem, Depression, and Emotional Reliance.)

川喜田二郎 (1967) . 発想法－創造性開発のために－中公新書

(Kawakita,J.)

中村佳子 (2002) . 二者関係におけるサポートの期待と受容の不一致の影響に関する研究. 広島大学大学院生物圏科学研究科

(Nakamura,Y.(2002). Memoirs of the Faculty of Integrated Arts and Sciences, Hiroshima University. IV, Science reports : studies of fundamental and environmental sciences 28, 127-129)

佐久本稔・橋本公雄 (1996) . 大学受験前後のストレス症状とその関連要因. 福岡女子大学人間環境学部紀要 28, 13-21.

(Sakumoto,M.,Hashimoto,K.(1996).Stress Symptoms and Related Factors Before and After University Examinations.)

周玉慧・深田博己 (1995) . 青年の心身の健康に及ぼすソーシャル・サポートのネガティブな効果. 広島大学教育学部紀要. 第一部, 心理学 44, 45-52.

(Jou,Y.,Hukada,H.(1995). The negqative effects of social support on mental-physical health of adolescents.

## The development of a scale measuring negative support for university entrance examinees. And the examination of the relationship between negative support and depression.

Kanae MIYATA\*, Yasushi FUJII\*\*, and Jun KANNO\*\*

\*Graduate School of Human Sciences, Waseda University

\*\*Faculty of Human Sciences, Waseda University

### Abstract

This study examined the notion of “negative support”. We assessed whether negative support prevented students taking university entrance exams from effectively receiving social support, and developed a scale measuring negative support for examinees. Furthermore, we examined the relationship between negative support and depression. To do so, we administered a survey about negative support to senior high school students. On the basis their answers, we allocated participants into the high support group or low support group. We employed Mann-Whitney-tests to assess the difference between scores on our scale and those obtained using the Center for Epidemiologic Studies-Depression (CES-D) scale. There was not a significant difference. But, there was a positive correlation coefficient between CES-D scores and two questions on our scale: “I get various suggestions about the things I have already decided to do” and “I receive nonsense advice from others.” Our results indicate that support without empathy or understanding may work in a negative fashion. Negative support may, therefore, trigger depression among students preparing to take university entrance exams.

**Key words:** university entrance examinees, negative support, depression